

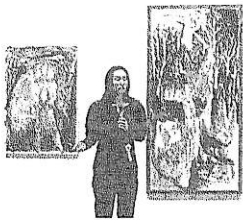
がながわ

美の手帖

川崎市岡本太郎美術館で開催中の「顕神の夢―幻視の表現者―村山槐多、関根正二から現代まで」は、今風に言うならヤバイ展覧会となろうか。なにしろ、「人間を超越した『何か』を感じし表現する」というテーマ。江戸時代の円空から新進気鋭の若手まで、約50人の「表現者」が感知した「何か」が、そこに顕れている。

太郎の置き土産

本展は、宗教学者で京都大学名誉教授の鎌田東二が「監修者」を務めている。仕掛け人は、同館館長で美術評論家の土方明司と、足利市立美術館館長で詩人の江尻澁。2人は「提案者」としてタッグを組み、岡本太郎を含む「表現



自作「21・9・18」「23・3・2」「23・3・4」(左から。作家蔵。数字は制作年月日)について話す庄司朝美(山根聡撮影)

川崎市岡本太郎美術館「顕神の夢―幻視の表現者―村山槐多、関根正二から現代まで」展

村山槐多「裸婦」(大正4〜5年) 川久万高原町立久万美術館蔵



自作「スサノオ」(平成26年、作家蔵)の横に立つ三宅一樹(山根聡撮影)



「霊性」という尺度 より豊かななるもの

昔たちの作品を市立の美術館に大集結させた。

「新しい試みの展覧会」と

土方が語る。「通常の教科書的な美術史、西洋の基準ではなかなか掬い取れず、はみ出してしまっていた大事な作家・作品を、新しい見方を想定して選んでみた。岡本太郎自身が『芸術は呪術である』と繰り返している。20代の頃にフランスに渡って民族学の造詣を深め、帰国して戦後、アーティストとしての直感を働かせ、それまで日本では美術として全く認められていなかった縄文土器を、初めて美術として捉えた。東北から沖縄にまでフィールドワークをして、西洋美術の価値基準をはるかに超えたすゝみのある文化、残された遺跡などを紹介した。そのことを念頭に置きながらこの展覧会を考えた」

そしてキーワードとしたのが「顕神」。「顕神」は「顕れる神」、あるいは「霊性」スピリット。江尻が補つ。「言ってみれば『霊性の尺度』で測り直しているのが作家たちという。み換えられ、より豊かなもの」とを今回、明らかにできれば

と思つ

アニマのビジョン

人間を超越した「何か」と、「表現者」との関係性を軸にした全5章構成。

第1章「見神者たち」
「何か」に憑かれ、いわゆる神がかりによって生まれた作品

第2章「幻視の画家たち」
常人では感じ得ない「何か」を幻視する作家の作品

第3章「内的光を求めて」
夢に現れるイメージのよう

に、「何か」からの刺激によって網膜を介さずに現れる光を留めた作品

第4章「神・仏・魔を描く」
「何か」の姿を模った作品

第5章「越境者たち」
別

次元の視点によって「何か」をもたらず作品
村山、関根、河野通勢、葛鉄五郎、古賀春江といった、すでに評価の定まった近代の名だたる作家が第2章に、また第5章には宮沢賢治、草間彌生、岡本、横尾忠則らがずらり。

村山と関根は本展のサブタイトルに名前が出ている。この2人について、江尻が解説する。
「村山は自分の内面から出てきた何かと格闘している。自分の中に過剰なものがあることは分かっている。それをいかにして手なずけるか、ビジョンとして訪れるものを定着させるか。描けば描くほど遠のくので、待つしかない。関根は夕方になると寂しく、何なのかが分らないが、祈る心が出てくる。内なるアニマ(魂)が女性の姿となって出てくる。憧れの存在に近づきたいと思つ」

「顕神の夢―幻視の表現者―」村山槐多、関根正二から現代まで。川崎市岡本太郎美術館(川崎市多摩区形原7-1の5。生田緑地内)で6月25日まで。午前9時半〜午後5時(入場は午後4時半まで)。月曜休館。観覧料は一般1千円ほか。「岡本太郎と成26年」展を7月2日まで同時開催。問い合わせは同館(044-900-9898)。

「この木には悲しみと怒りを含んだ何かがある。スサノオではないかと。その『霊性のカタチ』を手元のノミで彫り出した。
アーティストの庄司朝美は、アクリル板に描く。「私は幻覚を見たわけではないけれど、神話的なイメージの絵だ」といわれる。汚いものも奇麗なものも同時に存在しているこの世界のあり方を、そのまま一枚の絵として描き出すと、こうなる」と言う。
土方は「日本人の土着的な感覚・感性は意外にじつをい。木や石や山に霊的な力を見た時、畏れや敬いを持ち、手を合わせたりする。それは一神教的な世界では成り立ちにくい価値観であり、この『顕神の夢』の作家・作品の中にあらわれている」と感じると締めくくった。(山根聡)



関根正二「少年」(大正6年) 個人蔵

むらやま・かい

明治29(1896)年、現在の愛知県岡崎市生まれ。洋画家。大正3(1914)年、画家を志し上京。高村光太郎の工房に入りし。二科展出品作の1点が横山大観に買い取られる。7年、結核性肺炎に罹り、治癒と再発を繰り返しながら制作を続ける。8年、22歳で死去。代表作「尿する裸僧」(大正4年)。

せきね・しよじ

明治32(1899)年、現在の福島県白河市生まれ。洋画家。大正3(1914)年、交友のあった伊東深水の紹介で東京印刷会社圖案部に就職。翌年退社して放浪の旅に出かけ、長野で出会った河野通勢に絵の影響を受ける。7年頃から心身に不調をきたし、8年、20歳で死去。代表作「信仰の悲しみ」(大正7年、重要文化財)。